

「一流になりなさい。それには、一流だと思い込むことだ」という本からです
勉強すること。知らないことをたくさんすることだよ。それが成長につながる。

「自分の知らないことを否定するのは、一番程度の悪いことだ」この世の中は、まったく公平なんだよ。少しマクロにみれば、それがわかる。船井先生がそんな話をしていたとき、先輩の一人が異をはさんだのです。もちろん、そんなことで怒る先生ではありませんが、あまりに執拗に反論する先輩に、船井先生がそう言ったのです。勉強とは何か？いつも船井先生に言われたのは、知らないことをたくさん知ること、という指摘でした。船井先生は、世の中の構造、宇宙の真理をとことん勉強し尽くしたと思います。それは、人間はなぜ生まれ死んでいくのか？そして、死んでからはどうなるのか？という核心に波及していきました。どうでしょう。この命題に即答できる人は、そういないと思います。だからといって、多くの人間にとって無縁なことではありませんし、興味を強くもつことです。「人間について考えるとは、地球について考えることであり、地球について考えるとは宇宙を考えることだ」「人間、地球、宇宙のどれか一つが欠けても他が存在するということはありえない。また存在する意義もない」これは、地球物理学者、東大名誉教授の松井孝典さんが一九八七年に著した『地球・宇宙・そして人間』の一節です。太陽系第三惑星、地球だけになぜ海が誕生し知的生命が出現したか？松井孝典名誉教授は「それは奇跡と呼ぶには、あまりに必然的な出来事だった」と言います。「人間が誕生するような宇宙に進化する定数を、宇宙そのものが選んだとしか考えようがないのである」と述べて宇宙は人間を生み出すように進化しているとする「人間原理」について解説しています。この宇宙に偶然人間が誕生して、何の役割をもたずに存在するとはとても思えない。この松井孝典名誉教授の発想を読みながら、経営コンサルタント船井幸雄の目指す高みに思いを馳せました。当時、松井孝典名誉教授の本を読み漁りながら、人間がなぜ生まれたのか？その使命は何かと考えること自体に意味がある、いやそれ自体が人間の使命なのだと考えたものです。ともすれば人間はわからないこと、そして目に見えない形而上的なことを、否定したがるようです。デカルトが、「我思う、故に我あり」と看破したのは、そんな人間の摂理を戒めたのではないかとすら思うのです。知らないこと、根源的なことを知ろうとする。それこそが、人間にしかできないことだとも思います。とすれば、それが、人間が禽獣と違う大切な点でもあるのです。「目に見えること。いま必要なことだけを求めては進歩しないんだ。成長とはね、いまと自分だけ、という発想から離れることでもあるのだよ」一瞬の後、静かに語る船井先生を見ながら、全体を考える、よりマクロの善というフレーズの真意を考えはじめていました。いまだけでなく未来を考える。自分だけでなく他人、地域、地球、そして宇宙を考える。正しい発想、決断はそこから生まれると思うのです。視野を未来軸へ。そして世界軸へと広げる過程こそが、成長ではないのか？「そのとおりだね。判断基準が、より公的になり、マクロになっていく。それが成長なんだ」近代はデカルトの「我思う、故に我あり」という言葉から始まったといわれます。これはどうとらえるか、さまざまな見方があります。はるかな未来、いまここにいる自分から、認識を社会あるいは空想の世界へと広げられる。それが人間たるゆえんなのだと私は思います。いずれにしろ、知らないことを否定しては、自らの知性の可能性を否定してしまうことになるではありませんか！？知的好奇心を動員して、未知の地平を広げなければ、人生もつたいないですよ。「人間の役割は、ひょっとすると宇宙の究極の構造を理解し、宇宙がなぜ存在するかということを理解することにあるのではないか……」「宇宙とは何ぞやを理解したところで、人間はその役割をまっとうする」松井孝典名誉教授のこれらの言葉を、船井先生の言葉に重ね合わせながら興奮したり、黙考したりしていました。いま思うと、そんなことを深く考えられていた自分は、とても幸せだなと思うのです。

松井孝典名誉教授が『地球・宇宙・そして人間』で何と書いていますか？

()